

(11) さやいんげん

ア 各病害虫の防除

菌核病

灰色かび病

モザイク病

アザミウマ類

アブラムシ類

マメハモグリバエ

コナジラミ類(オンシツコナジラミ：施設栽培)

フキノメイガ

ハダニ類

ア 各病害虫の防除

【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病害虫)

菌核病

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病を認めたら、菌核ができる前に取り去る。
- 2 残さをほ場周辺に放置しない。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病を認めたら、薬剤を施用（散布）する。

灰色かび病

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病を認めたら、薬剤を施用（散布）する。

モザイク病

(耕種的・物理的防除)

- 1 無病株から採った種子を使う。
- 2 苗床には発芽直前から白寒冷紗をかけ、有翅（し）アブラムシの飛来を防ぐ。
- 3 本ぼでは、シルバーポリマルチを使用する。
- 4 発病株を速やかに抜き去る。

(薬剤防除)

- 1 アブラムシによって媒介されるため、本項の[アブラムシ類の防除](#)に基づき防除を行う。

アザミウマ類

・[共通防除の章のアザミウマ類の防除の項](#)を参照する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
- ※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- ※アザミウマ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。
- 2 発生を認めたら、薬剤を施用（散布）する。

アブラムシ類

(耕種的・物理的防除)

- 1 育苗時からアブラムシ類の発生に注意する。黄色粘着テープを施設の出入口や開口部の近く、若しくは苗の近くにつけるし、有翅（し）成虫が飛来していないか確認する。
- 2 近紫外線除去フィルムは成虫の飛来を減らす効果があるので、これらのフィルムを施設の外張りやトンネルに使用する。
- 3 施設では、側窓や天窓などの開口部に寒冷紗や防虫ネット等を張り、成虫の飛来を防ぐ。
- 4 マルチをする場合は、シルバーポリマルチなど忌避効果のあるものを使用する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
- ※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- ※アブラムシ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。また、アブラムシの種類と天敵の組み合わせによっては、効果が認められない場合がある。
- 2 気門封鎖剤を散布する。
 - 3 抵抗性の回避のため、異なった群から薬剤を選びローテーション散布を行う。

マメハモグリバエ

・ [共通防除の章のハモグリバエ類の防除の項](#)を参照する。

(物理的・耕種的防除)

- 1 薬剤防除のみでは防除が困難であるため、耕種的・物理的防除法も組み合わせて実施する。
- 2 成虫は黄色に強く誘引される性質があるので、黄色粘着板を用いて発生をモニタリングし、初期防除を徹底する。
- 3 成虫の侵入を防止するため、施設開口部には防虫ネットを設置する。また、紫外線カットフィルムの利用も有効である。
- 4 ほ場周辺部の雑草などにも寄生するので、特にキク科雑草を除去する等、ほ場衛生に努める。
- 5 収穫後の被害残さは発生源となるので、土中に埋設するか、ビニール被覆し熱処理を行う。
- 6 収穫終了後、地表の蛹の防除対策として、施設を密閉し土壌表面をビニール等で被覆することにより蒸し込む。水分のある植物がない状態で最低地温 40℃以上が数日続けば、蛹はほぼ死滅し、羽化成虫も 1 日で死滅する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
※ハモグリバエ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。
- 2 発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。

コナジラミ類(オンシツコナジラミ：施設栽培)

・ [共通防除の章のコナジラミ類の防除の項](#)を参照する。

(予防に関する措置)

- 1 連作する場合には、作と作の間に施設内に植物が存在しない期間を設け、コナジラミ類がリレーされることを避ける。
- 2 育苗期の防除に努め、コナジラミ類が寄生していない苗を定植する。鉢物など、栽培に関係のない植物は、施設内に持ち込まない。
- 3 寄生範囲が広い場合、ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 4 夏期には露地においても発生が多くなるため、秋期より栽培(定植)の始まる作型では、施設内への成虫の侵入防止対策を徹底する。0.4mm 目以下の防虫ネット、紫外線除去フィルム、光反射資材によるマルチ等を活用する。

(判断、防除に関する措置)

- 1 特にタバココナジラミは薬剤抵抗性が発達しやすいので、予防策を基本とした総合防除を行う。
- 2 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等を行う。
- 3 成虫密度の低下のため、粘着シート等を設置する。施設で発生予察のために黄色粘着テープを使用する場合は、侵入防止を徹底したうえで、施設の出入口や側窓付近に張り、定期的に交換する。
- 4 生物農薬を活用した防除を行う。
- 5 本圃において化学的防除を行う際は、早期発見、早期防除に重点を置き、薬剤効果に差があるので種の区別を的確に行う。
- 6 薬剤散布を行うに当たっては、葉裏に寄生している幼虫、蛹にも必ず薬剤がかかるよう丁寧に十分な量を散布する。さらに、薬剤が株全体によく到達するよう下葉の処分を早期に行うなど工夫する。
- 7 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。
- 8 施設栽培においては、栽培終了後に作物上に寄生したコナジラミの施設外への逃亡・拡散を防止するため、収穫後の残さは施設の密閉処理により、枯死、乾燥させた上で処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。
※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
※コナジラミ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。
- 2 発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。

フキノメイガ

(判断、防除に関する措置)

- 1 被害を生じる時期は作型によって多少異なる。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生を認めたら、薬剤を施用（散布）する。

ハダニ類

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬は予防的に散布する。

※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。

※ハダニ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。

- 2 気門封鎖剤を散布する。
- 3 発生が予想される場合には、薬剤のいずれかを施用（散布）する。